

器、農具、畜舎等々一切を完備し、いよいよこれからいふことになつたのが、昨十四年の年末であつたのです。而して私文が、親

内郷村報の

六大使命

- 一、政權政派を超越して、村人愛護主義を標榜す。
- 二、村人公私各機關の活動状況を報導し併せて其振興を計り、進現和進努力の實現を期す。
- 三、本村社會事業の徹底を期す。
- 四、村内の善惡興行を奨励し、惡之を懲罰す。
- 五、本村と本村出身者及本村歸郷者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
- 六、尙餘力を以て、國民善導に當る。

内郷村報

天法人則
從人順天
ルベシ

萬有は天法に歸す

予の人生觀

凡平道人 大内民惠

これは来る二十四日、教育會館に開催せらる、縣下方面委員大會に、「予の研究」として發表せし爲に、書き纏めた腹案の大要である。

一、緒言

今や我帝國は勿論全世界は、未曾有の時局に當面し、東西新秩序建設の爲に、各自其國家の總力を擧げて獅子奮迅、其光景を展望する時に、吾人は轉た懐愴の感に打たるゝを覺ゆるのである。

此時此際、我々國民各自は、確乎不拔の人生觀を確立し、其本分を自覺して、舉國一致、帝國の使命達成に、世界の平和實現に、勇往邁進せざるべからざる。一大責任を有するに、信するのである。

然るに國民の各層を、縱觀し横察するに、確固たる人生觀宗教觀を有する者、それ／＼幾干かあるの感なきにしもあらず、同時に我帝國の眞使命の根本義を、捕捉し得ざる者も、決して少くないと思はれる。こゝに於て予は、其不肖なも願ふ所、三十有餘年來、苦心慘澹漸くにして到達した、予の人生觀宗教觀の一端を、こゝに縣下の選良たる、有識有徳有力なる方面委員各位に、公開披露して、其御批教を仰がうと思ふのである。

二、懊惱煩悶

予は中産階級の家に生れ、物質的方面には、さして不自由をせななかつたが、家庭的にはあまり恵まれなかつた。少年時代は、いつた「人生」といふものは、どんなものであるか、神さか佛さかといふものは、實際あるものかないものか、若しあるとすれば、自分の様な仕合せなものか、救つて下さりませうなものか考へて、各宗のお寺にも、種々の教會にも出入りして、お坊さん方や、牧師さん方の御説教を拜聴したものである。されどいろ／＼と説いて下さつた、佛様阿彌陀佛、觀音様、神様(ゴット)西方淨土、天國等々の存在は、どうしても信じられぬ。唯其お寺なり教會なりに入らぬ。徳信の人々の、眞剣、同情、厚意等に對して、身に浸みてうれしく、且つ大なる感銘もなつた。こゝでは

三、轉迷開悟

渡米して落ち付いたのは、マンントンのシヤトル市で、先づ何より先きに、自活の道を講ずるに共、英語の勉強に取りかゝつたのであつた。日本で多少英語の本は讀んで居たが、其英語は更に實用には役立たず、先づ入學したのは、市内上流の夫人令嬢達が、奉仕的に教へて下さる、長老教會の夜學校であつた。先づ發音より日常用語の教授を受けたのであつたが、其日常語中に、ネーチャア(Nature calls)といふ英語に當面した。其直譯は「自然は私を呼ぶ」であるが、其意譯は、意外にも「便所へ行け」ことであつた。

予は此一語を、検討玩味する。其感に於て、然る、轉迷開悟、黎明の感に於て了つたのであつた。我々は其生命を維持する爲に、所要の食物を食する。其消化して其内より糞便を産み、其糞便は之を排泄する。之が自然の法則である。故に「便所に行く」こと

四、人生觀の確立

歸朝した予は、教育制度改革の資料を得る爲に、一時「早大」に籍を置き、其方面の研究に従事すると同時に、一面自由の立場から人生觀の討究には心魂を打ち込んだものであつた。而して其得た結果は、かうである。

あらゆる世の所謂既成宗教なるものを通觀するに、其開祖は何れも其當代に於ける大智識であつて、其時代の人々をして、首肯させ、信仰させ得る様に、予の所謂「天法人則」を、一種神聖なる「存在」として、それに倣依することに、安んじ立命をさせられたのである。こゝに、其一例を擧げて説明すれば、佛敎に於ける「南無阿彌陀佛」の阿彌陀佛は「天法人則」

を、自然が私を呼ぶといふ。何たる美しい、且つ徹底した言葉であるか、感嘆の至りである。而して同時に予は、又我々人間の生涯に於て、もう一度どうあつても、「自然に呼ばれる」ことがある。それは全生活機能、停止した時の「死」である。

我々の生存するこの地球は、太陽系の一遊星であつて、其自轉によつて晝夜を生じ、其公轉によつて四季を生ずる。之も自然の法則であつて、之亦我々は、どうあつても此法則には、無條件で従はさせられる。ひゞり我々人間のみな、地球上のあらゆるものも同様の法則に、絕對に順應した生活をするべきである。さういふ結論に到達し、晝は活動、夜は安眠、所要の食物を攝取するに共に、其殘滓は定期に之を排泄し、春夏秋冬に順應した生活を営む事一十年にして、予の健康は全く回復して心身共に爽快、悠々豫定の研究に没頭する事を得たのであつた。

而して予は、其當時より念頭を去來した問題は、我々は萬物の靈長とまで稱せらるゝ、生物中最上位に位する人として、社會の一員として、將た國家の一民として、此世に生をうけて居る。こゝに我々は、確乎不拔の法則を見出さなければならぬ。さういふ事であつた。而して其到達した結論を、略述すればかうである。

學者は、人間が此地球上に出現したのは、三十五萬年の昔と説いて居る。之を事實として考へれば、既に想像もつかぬ、悠久なる年所を経て居るのである。此間に於て我々の祖先が、お互に平和に幸福に暮らす爲には、何等かの「きまり」がなければならぬ。それには幾多の變遷はあつたらうが、之は約言すれば、習慣となり、道徳となり、法律となつて現はれたのである。之がその法則である。我々は此法則にも、無條件で従ふべきものである。さういふことであつたのである。

予はこゝに於て、仮りに其自然の法則には、「天法」とし、其習慣道徳法律には、「人則」と命名し即ち「天法人則に從順なるべし」といふ一語を創作して、之を予の人生觀とし、宗教として信するに至り、愈々益々頭からさなり體量に正に二十貫を突破するに至つたのである。

されど自ら密かに顧みて、世には大學者もあり、大宗教家もある淺學非才の一青年たる予、予輩の如き、淺薄なる體驗研究が、何等の價値をも認められざるべき慮り心中に深く之を感して、之が發表を後日に譲ることとして、在米滿三年にして、一轉米領布哇の、ホル、學園長(本願寺別院の經營)にして、當時布哇に於ける最大の日本語學校)に招聘せられ、布哇中學、同高女に關係し、其學務部の視學ともなり、布哇教育會の創立、教科書の編纂等々に、微力を致す。こゝに八年余、其傍ら佛敎兩教は勿論、各宗派の教義及び實際等々に就いて、聊かの研究を遂げて、歸朝したのは大正七年の初春であつた。

終生忘れられない。かくて予は、此世の中には神も佛もなきものか、懐懼煩悶、骨さ皮ばかりに瘦せ衰へ、(當時體量十五貫、現時十九貫、壯時二十四貫餘)肋膜炎を犯され、肺炎をわづらふに至つたのであつた。

而して其當時、そうした生活の中にあつて、予の唯一の慰安もなつたものは、予が九年間(小學校で八年間、予の創立した修學塾で一ヶ年)持ち上りて手塩にかけた教子達であつたが、其教子も既に卒業させ、夫々前途向上の指針をも與へて、重荷を下した様な氣輕さを覺え、乾坤一擲、年來研究し來つた教育制度改革問題、多年悩み來つた人生問題、當時の國情も等かの示唆、端緒、解決等々を得られたらぬかといふ様な、頗る茫漠たる考へも、單身渡米した時は、明治四十年の初夏五月であつた。

を、自然が私を呼ぶといふ。何たる美しい、且つ徹底した言葉であるか、感嘆の至りである。而して同時に予は、又我々人間の生涯に於て、もう一度どうあつても、「自然に呼ばれる」ことがある。それは全生活機能、停止した時の「死」である。

我々の生存するこの地球は、太陽系の一遊星であつて、其自轉によつて晝夜を生じ、其公轉によつて四季を生ずる。之も自然の法則であつて、之亦我々は、どうあつても此法則には、無條件で従はさせられる。ひゞり我々人間のみな、地球上のあらゆるものも同様の法則に、絕對に順應した生活をするべきである。さういふ結論に到達し、晝は活動、夜は安眠、所要の食物を攝取するに共に、其殘滓は定期に之を排泄し、春夏秋冬に順應した生活を営む事一十年にして、予の健康は全く回復して心身共に爽快、悠々豫定の研究に没頭する事を得たのであつた。

而して予は、其當時より念頭を去來した問題は、我々は萬物の靈長とまで稱せらるゝ、生物中最上位に位する人として、社會の一員として、將た國家の一民として、此世に生をうけて居る。こゝに我々は、確乎不拔の法則を見出さなければならぬ。さういふ事であつた。而して其到達した結論を、略述すればかうである。

學者は、人間が此地球上に出現したのは、三十五萬年の昔と説いて居る。之を事實として考へれば、既に想像もつかぬ、悠久なる年所を経て居るのである。此間に於て我々の祖先が、お互に平和に幸福に暮らす爲には、何等かの「きまり」がなければならぬ。それには幾多の變遷はあつたらうが、之は約言すれば、習慣となり、道徳となり、法律となつて現はれたのである。之がその法則である。我々は此法則にも、無條件で従ふべきものである。さういふことであつたのである。

予はこゝに於て、仮りに其自然の法則には、「天法」とし、其習慣道徳法律には、「人則」と命名し即ち「天法人則に從順なるべし」といふ一語を創作して、之を予の人生觀とし、宗教として信するに至り、愈々益々頭からさなり體量に正に二十貫を突破するに至つたのである。

されど自ら密かに顧みて、世には大學者もあり、大宗教家もある淺學非才の一青年たる予、予輩の如き、淺薄なる體驗研究が、何等の價値をも認められざるべき慮り心中に深く之を感して、之が發表を後日に譲ることとして、在米滿三年にして、一轉米領布哇の、ホル、學園長(本願寺別院の經營)にして、當時布哇に於ける最大の日本語學校)に招聘せられ、布哇中學、同高女に關係し、其學務部の視學ともなり、布哇教育會の創立、教科書の編纂等々に、微力を致す。こゝに八年余、其傍ら佛敎兩教は勿論、各宗派の教義及び實際等々に就いて、聊かの研究を遂げて、歸朝したのは大正七年の初春であつた。

與へられた紙面に、たゞ其の巻欄家の其後、山莊の思出等を申上げて、筆を擱めやうと存じます

本誌定価一冊五錢(十冊五圓) 郵費別
發行所 内郷村報社
編輯發行所 内郷村報社
印刷所 平活版所

矢野恒太序 大内民惠著 教育制度改革概論

(四六版二二頁 定價五十錢 稅六郵種)

「教育制度」の語は、一萬有は天法に歸す。於て予は、「萬有は天法に歸す」といふ一語を創作したのである。而して予は、二年前の恰度今頃或友人から「君の人生觀と一致し

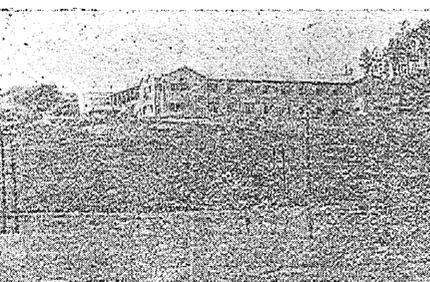
八、結 語 以上は、予が所信の要であつて、一億一心、この確乎不動の「人生觀」を、心身に體得して、帝國の大使命達成に勇往邁進、以て世界の平和を招來し、人類の幸福を顯現すべきである。衷心より

磐城 炭礦 附屬病院完成移轉

磐城七千従業員待望の、大病院は、其完成を告げて、此程全部の移載を了した。今其梗概を左に報道することとした。

其位置は、常磐線綴驛西方約十町、内郷村大字内町地内、住吉綴兩坑の中央丘上で、昭和十三年七月一日に起工し、敷地整理に、將た設計建築に、三年を費やし、去る七月二十一日愈々竣工したのであつて、總經費十一萬五千八百圓を要したのである。

其設備は、敷地一、三〇〇坪、建坪數七〇四坪七合階上二九七坪九四、階下四〇六坪七六。病室數一八室、北側病室五室、輕症患者室一室、重傷患者室一室、八名收容。診療室、内科二、外科三。身體検査室、施術室、婦人科室、準備室、太陽燈室、レントゲン室、藥局室



院病屬附礦炭城磐

付添看護婦室南北、醫務室洗濯室、燒却場、水呑場、洗面所、以上各一。講義室二、待合室三。

村 葬 八月十五日第三小學校に

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理を實際に、歴史を實際から、新に大内案主義を提唱す。天下知名の士の賛同放棄に違あらず。れど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威 前京大總長小西重直博士 著を寄せて曰く、多年の御體験と實地ノ御試練ニ基キ眞實國ノ大精神ヲ拜

發行所 日本評論社 東京京橋三丁目 東京所 内郷村報社

於て、名譽の戦死、戦病死を遂げられた、故陸軍歩兵上等兵小林恒夫、故陸軍輜重兵上等兵岡兼松兩君の爲に、關係者一同参列の下に莊嚴裡に村葬を執行した。

- 戰死者 指導標 舊盆に際し、墓參者の便宜の爲に、左の各所に指導標を樹てた。 白木墓地(願成寺) 大越中佐外六名。 宮墓地(瑞芳寺) 草野少尉外十四名。 内町墓地(清光院) 今上等兵外四名。 上綴墓地。 松崎二等兵曹外四名。

- 下綴墓地。 齋藤伍長外二名。 高坂墓地(眞光院) 長塚上等兵外四名。 御廐墓地。 野木伍長外一名。 御台境墓地。 星上等兵外三名。 小島墓地。 鈴木伍長。

昭和十内郷村方面助成會收支決算表

Table with columns for '收入之部' (Income) and '支出之部' (Expenditure). It lists various financial items such as '寄附金' (Donations), '預金' (Savings), and '雑費' (Miscellaneous expenses) with their respective amounts in yen and sen.

特志の數々

- 金拾圓、陸軍恤兵部へ渡邊嘉信。 金拾圓、同愛婦御廐支部。 金五圓、同鈴木喜美子外十二名。 金拾圓、同身代地尊祭典費節約。 東朝經由、眞光院關係一同。 金百圓、本村銃後會へ島田兼吉。

舊盆賑恤

村助成會より 四十四世帯九十二人に對して金一封宛。

教育浪曲

淺野記念館に於て山川八道氏、聽衆約二五〇名。

防空思想

普及映畫會。 八月十四日夜 金坂運動場に於て開催。入場者約四千二百人の盛況。

本紙贊助金寄贈芳名 金貳圓 福島 松田甲次郎 金貳圓 平 多田井笑次郎 金貳圓 同 折笠鬼千太郎

續開拓記録(一)

警城炭礦従業員 大内きみ

一、はしがき
其後は御無沙汰申上げました。殘暑なか／＼にきびしい折柄、先づ以て皆様の御健康をいのりつ、久方ぶりに、近況を報告させていただきます。

威の結婚と、孫の誕生の爲に、一時の考へで歸郷したので其前年の十月で御座いました。

三、御國の爲に

かくて主人は相變らず當地に、其他は山莊にあつて、大いに働かうと、互に意氣込んで居りました。今春三月歸郷し、本縣海外協會の役員會に於て、昨年渡米せられて、具に其事情を觀察して歸られた、理事の大原博士が主人が多年研究して、昨年の理事會に發表した、第二世補選問題や其他の意見に、妻も共鳴せられた。其の意に、主人は是非共協會の常務となりて、其理想實現の仕事をやつてもらひたいといふ御希望を、其會議に建議せられた結果主人が其を引きうけ月のうち半分を、縣廳で執務することに、又それと同時に、知事さんが會長として居らる、本縣協和會(内地人と半島人の協和を以て)の評議員といふことになり、警城炭礦に採用した、百五十人の半島人を預つてもらひたいといふ話が持上り、今迄通りの主人一人では、何共致し方がないの、苦心慘愴折角今日迄に、樂き上げた山莊を、閉鎖することは、誠に忍びないことではあつたので、今日の場合、より多く「御國の爲」になるかと思へば、協議は一決して、今春早々山莊閉鎖に取極め、年來我子の如く手馴した、家畜の数を處理し、土地家屋農具什器等を共儲、御近所の方々に保管方をお願ひして、涙をのんで家族全部が、こちらに引き上げて、以上の事業にせりかゝる事となつたので御座います。

四、一家の團聚

滿五ヶ年の間、私共の一家は、以上の通り南北に二分せられ、一家團聚の樂みを、味ふ暇がなかつたので御座います。思ひがけないう國家の非常時に遭つて、一般の御家庭とはあへてな、團聚生活にはいる運命に立ち至つたので御座います。それにしても其分丈は、一家緊縮して振ひ立つたわけでは御座います。而して前に申し通り、主人は月の半分は出陣し、一郎が副會長といふ格で會務一切を支配し、私は以後後見役といふ形で、由清彦の養育にあたつてふみ子(嫁)ととも、庶務會

大内一郎殿

景中御見舞有御禮申上候。一詩を賦して高堂の御清福を奉祈候。父移移民夢不安、兒勞業極辛酸。國家皆悉勞苦事、偏禱一途排萬難。昭和庚辰夏、外山牧風、註、牧風子(愛媛縣總務部長)

計にあたるといふ、役割なので御座います。但し炊事方手不足の折は、其方にも出動するので御座います。何ぞ申しても、言語風俗人情を異にする、半島の勇士百五十人の御世話は、並大抵では御座いませぬ。然しだん／＼私共は半島語を勇士達(日本語を、覚えて來ました)向ひつゝ、漸次和やかに、期らかにたひつゝあるや、只今のところでは、さして苦痛と感ぜず、寧ろ將來が樂しまれるやうになりました。次に皆様から、よく「孫はままだ一人か」、おたづねをいたしました。今以て國策にそはれず、一家の痛恨事といはれて居ります。前途はまだまだ、有望遠望で御座いますから、それを樂しみに、暫らくはお許しを願つて置きます。其一人の孫も、出産當時山莊が寒かつたのが、内地に歸選つて、湯治其他の攝生がきいたものか、めき／＼と健康を増進し、一丁前の亂暴兒となつてあれまはり、明けても暮れても、おばあちゃん／＼と、私につきまきまふて居りますので、勿論うるさくはありますが、又勿論可愛くつてたまらないので御座います。

五、賢二の其後

賢二は、二郎の改名で御座います。皆様からのお便りの中には、又必ず二郎其後の消息は、どうかまつられませんか、其「其後」を一寸申上げておきます。先きに本紙上でお知らせしておいたと思ひますが、中學を出る、兄と志を同うしたので、山莊に引き取つて一年間、開墾に従事されたのでしたが、莊の方針が、家畜本位に決定するに及んで、畜産の研究が必要となつたこと、本島に希望するので、關立原駒内種畜場に入つて、一ヶ年間の修業をさせ、其後山莊にもつて、働いて居つたのですが、どうしたはづみか、足首をうづつたのがもとで歩行にも自由な感じがなくなつたので、本人は勿論、一家に於ても、これは一大事と、早速帯廣市を始め、近邊の醫師にもかけたのですが、どうしてもうまくなはず、最後に札幌大に参つたら、靴の底に特製の敷皮を入れて穿き、過激な労働をへしなかつたら、約一年半位でなほさうなりましたので、當地に歸へり其通りにして専ら静養に努めさせておいたので、更に効驗がないので、みんな悲觀して居りました。さうなると、人に診て貰いたら、之は膝の關節にも、關係があるのだといはれて、一寸手をかけて揉んで下さつたら、それこそ奇蹟的に全快してしまつたのです。

二、清水山莊
清水山莊は、豫定の通り十町歩の開拓を終り、更に隣接林三町歩を拂下げ、畜産本位の計畫を立て牛馬、豚羊、兎鶏等々の家畜も充實し、其乳牛より搾取る牛乳を清水町の「極東練乳」に販賣して生活の中心資にあつて、漸次其を擴張して、大成を期してまうと段取り、それに要する住宅は勿論、什器、農具、畜舎等々一切を完備して、いよいよこれからといふことになつたのが、昨十四年の年末であつたのです。而して私達が、親

内郷村報の

六大使命

- 一、政務政議を懇話して、村政を善美せしむ。
二、村内外公私各機關の活動状況を報導し、併せて其協力を計り、進現和進努力の實現を期す。
三、本村社会事業の徹底を期す。

- 四、村内の善美興行を奨励し、善之を獎勵す。
五、本村を本村出身者及本村歸郷者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
六、尙餘力を以て、國民善導に當る。

本報發行は六内一家の事業に於て、其の發展は子孫に對する遺言を發するもなり。

本報定價(一)部金五錢(一ヶ年)部金四十八錢
發行所 内郷村報社
編輯者 大内きみ
印刷所 平活版所

内郷村報
天法
從人
ナ則